

あんまり うまくないね

あれは小学六年生の冬休み。その日、私はいつものように仲良しの友だちの家に遊びに来ていた。家には友だちと私、そして友だちのお母さん。小学生の頃、彼女にはご飯をごちそうになったり、お出かけにいつしよに連れて行ってもらったり、とにかくお世話になった。表裏のないサバサバとした明るい性格で、数少ない大好きな大人のひとりだった。

こたつに入り、漫画を読む友だちの横でぬくぬくしあわせな気分で落書き帳をひらく私。手には色鉛筆。何描こう。ふと、お気に入りの漫画のキャラクターを、いつもより本気で描こうと思いつく。友だちのお母さんに絵を褒めてもらおうと思ったのだ。当時から絵を描くことが好きで、時々友だちに褒められもするので、自分は絵が上手な方だと信じていた。結構いい感じに描けたその絵を自信满满に彼女の元へ持って行く。そしてもらった第一声がこうだ。

「う〜ん。あんまりうまくないね」

明るい口調で放たれた想定外の言葉に衝撃を受けた。自分がその時描いた絵は、いつもなら友だちも親も「うまい」と褒めてくれるものだ。でも彼女は「うまい」とも「いい」とも言ってくれなかった。ショックだったけれど素直に受け止められたのは、信頼している相手だったからだろう。振り返れば、これがはじめて人からもらった嘘やごまかしのない感想だったと思う。すごく悔しかった。だから、家に帰ってまた同じ絵を描いた。自分が本当にいいと思える絵になるまで。そして後日、あらためて描き直した絵を見てもらった。

「この絵、うまいじゃん！」

「ほんと？」

うれしい！という気持ちと手応え。さしてうまくもない自分の絵に正面から向き合って、はじめて得るものがあった。

もっとうまくなりたい。そう思い、描き続け、気づけば二十五年たっていた。いつまでたっても、自分がいいと思える絵を描くことは難しい。描けば描くほどハードルがあがっていくばかりだ。完成した絵に、正直な彼女が頭の中で感想をつぶやく。手厳しくもやさしい言葉が、今日も私を鼓舞してくれる。



1985年、石川県生まれ。

リクルートのマーケティング局でアートディレクター、同社ギャラリーで企画・制作を経験。

現在フリーランスのイラストレーター・漫画家として活動。

「日常の中のふしぎなモノ・コト」をテーマに、個展やグループ展などで作品を発表。

令和6年度版『国語』教科書の表紙を手がける。